

『紙の船、濡れながら大海を往く』

樋口ミユ

登場人物

あたし

作家

ニコ（お母さん）

ちんこ（お兄ちゃん）

溜息（お姉ちゃん）

唸り（小学校3年のアタシ）

即身仏（僕の声）

新米看護師の声

救急隊員たち

僕

「僕」の後ろ姿。
海を見ている。
どこまでも続く、
海を見ている。
波の間に間に、
言葉が潜んでいる。
白い飛沫の一粒一粒が、
言葉の一言一言になる。
海を見ているのは後ろ姿の「僕」。
聴こえてくる言葉の声は、「あたし」。

あたし

紙の船いつか沈む
木の船いつか朽ちる
コンクリの船いつか崩れる永遠の船
沈まず朽ちず崩れない永遠の船それは嘘
沈まない船は嘘
朽ちない船は嘘
崩れない船は嘘
沈んで眠って目覚めてまた眠る
朽ちて眠って目覚めてまた眠る崩れて眠って目覚めて
また眠るだから眠らない船は嘘
眠らない紙は嘘
眠らない木々は嘘
眠らないコンクリは嘘
眠らない町は嘘
眠らない雨は嘘
眠らない工場は嘘
眠らない花々は嘘
眠らない硝子は嘘
眠らない川は嘘
眠らない靴は嘘
眠らない猫は嘘
眠らない鍋は嘘
眠らない風は嘘
眠らない灯りは嘘
眠らない石コロは嘘
眠らない時計は嘘眠らない子どもだけが、

あたしの言葉が途切れた。

それは波音が聞こえなくなっただのと同じ。

もう波はどこにもない。

海はどこにもない。

あるのは僕のベッド。

僕の布団。

僕のシート。

ベッドにもぐりこんだ僕は、

そっと顔を出す。

のっぺりとした白い顔をした僕は、

こんなことを呟く。

僕 お願いだよママ。どうか僕の顔を優しく撫でたりしないで。眠れ良い子よなんて歌わないで。

もう聞き飽きたよ。「夜のために、眠っている間に、あなたはぐんぐん大きくなるの。だから寝たふりはやめて本当に眠りなさい」ワカッテないな。早くその扉を開けて子ども部屋から出て行つてよ。パパがベッドで待ってるから早く行ってあげなよ。僕はひとりで大丈夫だからひとりのほうが大丈夫だから。寝た、寝たの、眠ったのねなんて念入りのチェックなんてやめなよ。僕にかまけていたらパパを赤い下着の美人部下に持って行かれちゃうのにお願いだよママ。早く僕をひとりにして。早く僕に僕を返して。前髪を掻き分けてオデコを撫でて満たされるのはママだけだ。こんなに寝息をうまく立てているんだから、だまされるのもオンナの魅力だよ早く早く早く。起こしちゃいけないわとスリッパで後ずさつて。早く早く早く薄目を開けている顔が痙攣しそうだ。早く早く早くギイバタンの音が合図。

ギイバタンと聞こえた途端、

僕 ベッドの下の暗闇を覗き込む。

僕はシートをほうりなげる。

僕 ハロー……一日ぶりだね。

僕は手を伸ばす。

僕 ハロー……皮の取っ手を思い切り引っ張ってハロー。ベッドの大きさと同じくらいのトランクを引きずり出してハロー。金色の鍵穴に銀色の細い鍵を差し込むハロー……

ありもしないトランクをゆっくりと開ける。

途切れたはずの波音がかすかに、かすかに、また聞こえ始めた。

僕 ハロー。トランクいっぱい的大海原。ハロー。小さなしぶきが僕の頬にぶつかってまた弾け

る。小さな波音。水平線が見える。ほらむこおおおおおのほうにちいいいいいいいいい影がぼつん。目を凝らす。小さな影はゆつくりゆつくり僕のほうへと進みだす。あれは筏。僕はこれからニンゲンのヒミツを探す旅に出る。

僕は海の方こうを見る。
と、

水平線を超えて、
何かがやってくるのだ。

ニンゲンのような、
ニンゲンでないような。

幻想のような、
現実のような、

のっぺりとした白い顔の団の、家族。
ゆつくりとこちらへやってくる。

現在 1 あたしと作家

物語は突如、引きちぎられる。

作家 違う。

「僕のベッド」は病室のベッドへと変わり、のっぺりとした白い顔の家族は入院患者へと変わり、カーテンで仕切られたそれぞれの空間へと身をひそめる。

「僕」も入院患者のひとりとして仕切られたカーテンの中へ。右隣からはイビキ。

左隣からはラジオの音。

ななめ右側後ろから荒い息。

ななめ左側後ろからはうなり声。

真後ろのカーテンからは、無音。

大部屋病室。

カーテンで仕切られたひとつの空間に、あたしと作家がいる。

作家 違う。初めは紙の船が来るんや。

あたし 筏やっつて。

作家 紙の船や。

あたし あたしのほうが憶えてる。

作家 話してたん俺のほうやろ。

あたし 今のそのぐずぐずの頭で何言うてる。

作家 昔のことはちゃんと覚えてるわ。

あたし ハッ。

作家 ハッ。

あたし 筏。

作家 紙や。

あたし 筏。

作家 順番間違えてるんちゃうんか。紙の船で、コンクリで最後が筏や。ココ書きなおせ。

あたし ちゃうて、筏が来て、コンクリで、最後が紙の船。

作家 せやったか。

あたし そうや。

作家 い、かだ、いかだ、かみ、いかだ、い、かみ、

あたし あたしの脳味噌のほうが若いねん。信用し。

作家 40は若い言わん。

あたし まだ39や。

作家 一歳をケチりだすともう末期やぞ。

あたし 末期通り越して脳味噌溶けはじめてるあんたに言われたない。

作家 ほなお前続き言えるか、憶えてるか、話せるか、続き、続き、

あたし すぐには思い出されへんわ。もう30年も前に聞いたことなんやから。でも最初は筏や。それは憶えてる。書き換えへんからな。あれは筏。

作家 だからその続きは、

あたし 思い出すから待ちいさ。なんやったかな。筏がやってきて、

作家 なんか乗せてやってくるんやそれは。なんやったか。おい、お前もはよ思い出せ。

あたし ちよう、黙ってえうるさいわ。

作家 ボケっとしとつたら全部忘れてまうやないか。

あたし ボケ。

作家 お前やお前のことや。

あたし あんたが勝手に口からデマカセで話したもん、正確に覚えてるか。

作家 デマカセちゃう。

あたし そしたらオリジナルの本探したら。そのほうが早いやん。

作家 あるかそんなもん。これは聞いた話や。

あたし そうやったん。

作家 俺の創り話ともちゃう。俺も聞いたんや。寝る前に。

あたし そしたら話してくれた人に聞けば。

作家 もうおらん。とうの昔に、もう、おらんくなったわ。

あたし 誰よそれ。

作家 おかん。

あたし ああ、おばあちゃん。

作家 そうや、おかんや。

あたし なにそれ、それやったら代々続いているんかこの添い寝の話は。

作家 その年になつても誰にも話してないからお前の代で打ち止めや。

あたし おねえとおにいが子どもに話してるんちゃう。

作家 お前にしか話してない。

あたし なんであたしだけ。

作家 ぐずつてぐずつて全然寝えへんかったからや。毎晩毎晩何やっても寝えへん。車に乗せて

町内何周もしてやつとウトウトしたと思つて布団にいたらギャア言うてまた泣き続ける。最終

兵器やったんやこの話は。

あたし なんで最終兵器なんよ。話すくらいさっさと話したらあたしもさっさと寝たんちゃうの。

作家 話すのに体力いるんや。

あたし なんやそれ。夜中に運転も体力いるやろう。

作家 なんせこれはニンゲンのヒミツの話や。

あたし そんな大層な話やなかったやろ。

作家 これ聞いたら、同じように。俺と同じようになるかもしれへん、思たから、別に話したい

もんちゃうかったわ。

あたし 呪いの話なんかこれは。

作家 そうかもしれん。

あたし なわけないやろ。

作家 お前、

あたし なに。

作家 なんや。

あたし なにいさ。

作家 なんで結婚せえへんのや。

あたし あんたに関係ないやろ。

作家 俺のせいか。

あたし 自意識過剰ちやう。

作家 俺のせいや言うたら気楽にならへんか。

あたし 関係ない。

作家 そうか。

あたし もともとあたしは血の繋がった家族には縁がないんやと思うわ。

作家 自分で縁遠いもんにしてるだけやろ。

あたし そうやで。あんたの血から遠く離れたいねん。

作家 やっぱり俺のせいやな。

あたし 死ぬ前っているんなこと懺悔したくなるんやろ。好きに思てたらええわ。でもあんたと

あたしは関係ない。あんたとあたしは違うねん。

あたし、時計を見た。

それぞれのカーテンの隙間から、

他の入院患者たちが、あたしを見ている。

けれどあたしは気がつかない。

あたし もう時間やから帰る。

作家 あほか、帰るな。

あたし 消灯。

作家 まだ時間あるやろ。続き言え。話の続き。紙の船が来てその続き。

あたし あたしが寝る前に聞いた話は紙やなくて筏やあ言うてるやんかも。

作家 そうや、あれや、やってきた船にはあれが乗ってるんや。白い旗がはたはたはたはたはた大きいんや。海の風にひるがえって、白い旗の下、紙の船に乗った黒い、あれ、あれや、あれベントツや。

あたし 紙にベントツは沈むやろが。

作家 そんなん言うたら筏にベントツでも沈むやろが。

あたし 筏のほうが耐久性ある。

作家 ちやう。

あたし 何やねんな。

作家 違う、ベントツちやうわ。似てるけど、あれや黒い、ぴかぴかした、ベントツみたいな、でも細長い、あれやあれ。ベントツやなくてベッドやなくて、俺がそろそろ入ってもよさそうな、

あたし ああ、そうやった、かん、

作家 棺桶や。

あたし 筏に乗った棺桶。

作家 そうや、思い出してきたわ。

あたし ほら、やっぱり筏やったやんか。

作家 筏に乗って棺桶が水平線のむこおおおおおのほうから海面滑ってやってくる。やってくるねん、思い出したわ、筏や。

あたし だからそう言うてるやろ。

“あのお、すいません。カーテン開けますよお”

看護師の控えめな声が聞こえた。

そのせいか、入院患者たちの姿はいつの間にかカーテンの中。

あたし あ、はいはい。

あたしはカーテンをすりと抜ける。

作家は、あたしと看護師の会話をじっと聞いている。

あたしの声 なんでしょ。

看護師の声 あのですね、えとですねえ、病院はね、あのですね、共同生活でしてね、お声がね、お声がちよつとばかり大きくていらつしやるのでね、

あたしの声 ああ、苦情ですか。

看護師の声 そうなんですいやそうじゃなくてえとですね。

あたしの声 いつもなんですかあれ。

看護師の声 あはい、入院してからずっと船の話をしてらつしやって、

あたしの声 そうですか。でもあたし今日呼ばれて初めてここ来たところなんでいきなりそんなこと言われても、でもまあ消灯ぎりぎりまであの調子で喋ってたら迷惑ですよ。意味不明やし意味はあるんやけど声デカイし、

看護師の声 もう少しボリュームをですね。

あたしの声 下げられるんやったらもうとつくに下げてるでしょう。

看護師の声 一般病室が空くまであと1週間かかるんです。もしあの、その、あれやったら今から個室に移られるんやったらすぐですけど。

あたしの声 ハッ。

看護師の声 は。

あたしの声 すみません個室でさらにそんなお金ありませんけど。

看護師の声 そうですか。

あたしの声 そうなんです。すみません静かにさせますすみません静かにさせますすみません。

看護師の声 あちよつとねちよつとだけ気にしてもらったら、

あたしの声 はいすみませんすみませんすみませんはよ死んだらええ思いますわ。

作家はじつと聞いていたが何かを思い出す。

作家 そうや、それから続きや。書けよ、忘れんうちに。僕が棺桶を開ける僕が棺桶を開ける僕が棺桶を開けたら108種類の免許を持った年老いた僕が棺桶に眠ってる僕は僕を見つける死んだ後の僕を見つける。そうや、そうやった。思い出してきたで。おい、

あたしはカーテンを開けて、

あたし そらこれうるさいわ。

作家 水平線の向こうからおおおおおおおい、おい、書け、はよ続き書きとめろ、俺喋ってるんやからはよ書いてくれ。

あたし 苦情来てるて言われたやろ。

作家 おおおおおおい。

あたし うるさい言うてるやろ。

現在 2 あたしと患者たち

開け放たれたカーテンからひよっこり、
のっぺりとした白い顔をのぞかせるのは、患者ニコ。

患者ニコ そそそそそれちやうでねねねえちゃん。

前歯が溶けてなくなって、他の歯はヤニで黄色くなった男がにやにや。

あたし は。

患者ニコ おおおお俺ら苦情言ういういうてないで。

あたし は。

患者ニコ おおおおおお俺らさっかんの話はなしはなし聞いてるで。

あたし さ、っかん。

患者ニコ さ、さささ、さ作家さんからさっかん。おおおお俺に、にこにこやからニコ。苦情言うてのるのは看護師のほうやろそそそそれを俺らのせいにしてるだけや。なあなあなあ、あたし さっかん、ハッ。

患者ニコ いいいい移動すんの、さ、ささささっかん、いい移動すんの。いい一般いくの。こくこく国保になんの。せ、生保になんの。なあなあなあもうこ、ここには戻ってこんの。

あたし こくほせいほ。

患者ニコ こくこくみんけんこうほほけん。

あたし 国保。

患者ニコ おおおお俺らか、カルテになんてか、書かれるか知ってるかねえちゃん。せいせい生活保護受けてたらせ、生保や、でもおおおお俺らはちやう。こ。こ。こ。コーロや。行く路て書いて、行路。

あたし コーロ。ああ、行路。通り道。世渡りいう意味もありますね。

患者ニコ なななんて。

あたし 路上生活者のことですね。

患者ニコ よう知つとるねねねえちゃん。通り道にごろんや。おお俺はててて天王寺でごろん、ささささ、さ、さっかんはに、西成でごろん。か、肝臓、肝臓やられて、ううう、うまいこと、き、救急車、乗れて、く、車に、ぶぶぶ、ぶつかつたら、う、うまいこと、び、病院に、入院出来るんや。さ、さっかんも、う、うまいこと、ああ、足ぶ、ぶつけたららしい。

あたし みたいですね。ずっと、あんな調子ですか。

患者ニコ ささ、さっかん、ふ、ふね、乗るで。おおお、俺らも、のの、乗りたいわ。ささ、さっかん、こ、こ、子ども、あああみたみたいな、で、で、でかい、子ども、おおお、おったんやな。ええええな、あ、ああんた、めめ、面倒、見るんやな、ええ、え、ええな。おれ、俺んとこ、れれれ、連絡、したけどむむむ無視、無視やでねねねえちゃん。

あたし ちやいますけど。

患者ニコ あ、ににににちやんか。

あたし よう間違われるけどちやいます。それに父やないです。

患者ニコ　ちち、ちやうの。そしたらあ、あ、ああ、愛人かあ。
あたし　は。

患者ニコ　あああ愛人なんかふ、浮浪者がどうやってあ、愛人つく作れるんや。

ゴッ。

息が止まるようなイビキがひとつ鳴る。

あたし　あ、止まった。

患者ニコ　お。ち、ちち、ちんことうとうとうし、死んでもたか。

あたし　ちんこ。

患者ニコ　ののどちんこ、でで、でかすぎて、いいいいびきもでで、でかい。

イビキが聞こえていた薄黄色のカーテンがゆうらり開く。

患者ちんこ　いきしてるけどしぬかおもたわあ。

また、のっぺりとした白い顔が見えた。

患者ちんこ　あいじてんや。

患者ニコ　ささ、さ、さっかんあ、愛人、この人あ、愛人なんやて。

あたし　や、それはちやうんですけど、

右側ななめ後ろのカーテンが開いて、

患者溜息　はああああああああああああああああああ。

憂鬱な溜息が病室を覆う。

のっぺりとした白い顔がさらに青白い顔の男。

患者溜息　ラーメンですかうらやましいですね。

患者ニコ　さささすがさ、さっかんやろ。

あたし　誤解があるようで、あの、

患者ニコ　こここいつた、たた、溜息。

患者溜息　つきたくなりますよ溜息の100くらいは僕はねこんなところにいるような人間じゃないんですよまわりが遅いんです遅すぎて僕についてこれれず僕だけがこれはもう落ちこぼれではなくて浮きこぼれなんですよ本当なら会社社長やってラーメンの10人くらいは横につれて当然なのは僕のほうではあああつあああああああああああああ。
あたし　うっとおしい。

左側ななめ後ろのカーテンが開いて、甲高い唸り声が響く。

虫の羽音みたいな。
耳触り極まらない。
虫みたいに小さい男がまたまたのつぺりとした白い顔をちよろりと出した。

あたし あたし愛人やないですからね。

患者唸り u u u u u

あたし この人は何ですの。

患者ニコ みみみ、見たまままま。

あたし あだ名は唸りですか。

「あたりや」

「さすがさっかんの愛人」

「センスええわ」

入院患者たちが好き勝手に喋る。

あたし 次はこっちのベッドの人出てくるんですか。

真後ろのカーテンを指差した。

患者ニコ そ、即身仏は何も言わん。

あたし は。

患者ニコ ずっと眠ってる。ででで、でも、ははは、話は、きき聞いている。そそそそつとしいたらええ。

あたしは大部屋総動員の様子を見て、仕方なく。

あたし はいどうも。父がお世話になってます。

患者ニコ ちちちちちちち。

患者ちんこ あいじんちがうんかあ。

患者溜息 世間の愛人関係の言い訳の第一位は親子だと偽ることらしいですよ。

患者唸り f u n n n n

あたし 愛人やなくて父です。ほんまに。でも父やと思てませんから。とうの昔にやめました。

患者唸り f u u n

患者ニコ そそそそういう意味なのなるほどな。おおおお俺は縁きら、切られたから、ま、ま、まあなんとなく分かるわ。

患者ちんこ あるなあようあるはなしやなあ。

患者溜息 はああああ僕は僕のほうから捨てましたけどね。

患者唸り u n u n u n u n

患者ニコ そ、そ、そいでも連絡もろたら見舞ってきてるんやからなあなあなあ。

患者唸り u n u n u n

患者溜息 親子関係の修復ですか。

患者ちんこ あるなあようあるはなしやなあ。

患者唸り un un un

あたし 違います。死ぬところ確認しに来たんです。

好き勝手に喋る入院患者たちはびたりと止まってあたしを見た。

あたしは作家の背中に言葉を投げつける。

あたし 聞いているか。あなたの死ぬところ確認しにきてん。最後の面倒見てもらえる思てたら申し訳ないけど、あたしはあんたが死ぬところ見るために、だから来てん。

作家 ハッ。

あたし その鼻で笑うんやめてくれるかな。

作家 お前もやってるやろが。

作家 同じように。

作家 だから。

あたし だからナンや。

作家 だから連絡したんや。

あたし は。

作家 これは遺言や。

あたし は。

作家 昔、寝るときいつも話したったあれ、思い出したいんや。お前もとうに忘れてたやろあれ。ほんでどうやった。筏が来てどうやった。はよ書き留めてくれ。思いだしているうちにはよ。鬼が来てまうやろ。鬼が全部トランクごとゴミ箱に捨ててしまったらもう手遅れや。はよ、はよ書き続けてくれ。筏に乗ってやってくる。トランクどこやった。開けて確かめるんや。トランクないやないか。ベッドの下に隠してた、トランク捨てたん誰や誰や誰や誰や誰や誰が隠した誰が捨てたやっぴり鬼か鬼は誰やお前か誰や裁判やこれから鬼の裁判をする。

作家は話していくうちに興奮し始める。
もうほとんど絶叫に近い。

あたしは薄黄色の病室のカーテンを握りしめて、
ザアアーつと引いて、作家の姿を見えなくした。

あたし ほな、あたし帰りますわ。

カーテンの向こうから鬼の裁判をすると絶叫が聞こえ続けている。

患者ニコ ええええ、帰えんの。書き留めんでええの、ささささっかん、言うてるけど、
あたし あの人、作家ちゃいますよ。

ちらりとカーテンを見る。

あたし ゲージョツ、バクハツさせてるつもりか、あれ。自称作家らしいですわいつのまにか、
会わんうちに。

患者溜息 僕は自称元会社社長志望ですけど。

あたし それで結局行路病室とは、夢破れましたか。

あたしの質問には答えずに、ため息だけをついて溜息は自分のカーテンの中へ逃げ込む。

患者ちんこ ゆめだけがあるんやあぶれたらふつうにはたらいてるてえさっかんもゆめのつづき
やなあ。

ちんこもぼやきながらカーテンの中へ。

患者唸り un un un

続いて唸りもカーテンの中へ。

あたし 父は元会社員でしたけど、そのうち自称宗教家になって放浪、それで今は自称作家で、
なんでもかんでも自称ですわ。定まりません。

患者ニコ は は そそそやけどじ、自称以外にナニがある。

ニコもカーテンの中へと戻ろうとした時、

ふと、声が聞こえた。

姿を見せないもうひとりの患者の声だろう。

患者即身仏 なんでも全部自称。言うたもん勝ち。

患者ニコ めめめずらしな。そくそく即身仏喋ったで。

ヒトリゴトのように言って、ニコも自分のカーテンを閉めた。

残されたあたしは、姿の見えない患者即身仏に言ってみる。

あたし　そうですか。そしたら。言うてまいりますけど、父は正真正銘のキチガイですわ。患者即身仏　キチガイがいの人間なんてな、見たことない。

また、即身仏が喋った。

全てのカーテンは閉じられて、あたしだけがいる。

あたし　ほな皆さん、おやすみなさい。あの人死にそうになったらまた来ます。

病室に飛び込んでくる新米看護師の声。

「あのお、大丈夫ですか、何かありましたか」

あたし　別に。キチガイが叫んでるだけです。

なぜか世捨て人の浮浪者たちはコトリとも音を立てず静かで、すっかり自分のカーテンの中、姿も見せず。ただ看護師の声だけ。大声を上げる。

「どうしたんですか」

あたし　なんですか。もう消灯なんで帰りますけど。

「どこいかはったんですか」

あたし　は。

「お父さん、どこいかはったんですか」

あたしはシャアアアアアンと勢いよくカーテンを開けるが、

「どこいかはったんですか」

カーテンの向こうに、からっぽのベッド。

「トイレですか」

あたし　行ってない。

「散歩ですか」

あたし　なんでやねん。

「徘徊始まったんですか」

あたし　人生そのものを徘徊してるようなもんやろ。

「どこ行ったか知ってますか」

あたし　知らんわ、そんなん。

「パジャマ脱ぎ捨ててますよ」

あたし　そしたら、まっばか。また、まっばか。

あたし、思わず、笑いがこみ上げた。

あたし　まっばで、ニンジンでも削ってるんちゃいますか。

「はい、何言うてはるんですか」

「ベッド」

「ベッド、ベッドの下」

「ベッドの下に、下に、下に、」

「あの、あの、あの」

あたし　何ですか。

「ベッドの下に、こんなもんが、」

あたしは、ありもしないトランクを見た。

「ナースコールナースコール、患者さんが、患者さんが」

あたし　……ベッドの下……

あたしは手を伸ばす。

あたし　……皮の取っ手を思い切り引っ張って……ハロー……

添い寝の物語の冒頭を思い出すのだ。

あたし ……ベッドの大きさと同じくらいの特ランクを引きずり出して……………金色の鍵穴に銀色の細い鍵を差し込む……………

あたしはありもしない特ランクをゆっくりと開ける。

あたし トランクいっぱい的大海原。小さなしぶきが僕の頬にぶつかってまた弾ける。小さな波音。水平線が見える。ほらむこおおおおおおおおのほうにちいいいいいいいいいいいいいいいい影がぼつん。目を凝らす。小さな影はゆっくりゆっくり僕のほうへと進みだす。あれは筏。僕はこれから、

カーテンが海の風に揺れた。

過去の現実1 アタシの家族とそれを見つめるあたし

揺れたカーテンから現れたのは、患者たちではない。
一列に並んで、今のあたしを見ている。
アタシの家族たち。

あたし トランクの蓋を開けたら、小学校3年生の頃のアタシがいた。

家族の列から一步踏み出す小学校3年生のアタシ。

あたし 明け方前、キッチン。

家族の列からまた一步踏み出すのは、お母さん。

小学校3年生のアタシはお母さんを見る。

あたし お母さんはもう三ヶ月も前から毎晩あたしの部屋の布団に潜り込んで寝てる。

お母さん お父さんのイビキ……うるさいから……

あたし ほんまの理由は知らん。おとんとおかんの和室に妙な神棚が飾られるようになってから三ヶ月。

小学校3年生のアタシは神棚を見上げる。

あたし 叫び声に目が覚める。一階のキッチンから。階段を二段、もう一段、降りて行く度に、叫び声は大きくなる。薄暗いキッチンと神棚のある和室はガラスの引き戸ひとつで仕切られて。見下ろすのはあたし。

小学校3年生のアタシは神棚から視線を床へと移す。

と、そこに、作家がうつぶせになって唸っている。

あたし まっばのおとん。開け放たれたガラスの引き戸の棧でニンジン削る、まっばのおとんを見下ろす。あ、指が砕けてる。ニンジンの赤色を、肌色と間違えた。ニンジンの欠片を、ニンゲンの欠片と間違えた。和室の神棚を、キッチンから見上げた。

じっと作家を見下ろしていた小学校3年生のアタシは、再び神棚に目をやる。

あたし 神様がそこにいる棚。でも見えへんかった。見えているのは、まっばのキチガイ、が、あたしを見た。

作家 みんな起こしてこい。

小学3年生のアタシ（以下、過去のなかではアタシで記載） 寝てるで。

作家 そやから起こせ。

アタシ まだ太陽昇ってないのになんで。

作家 今から鬼の裁判をする。

アタシ 鬼。

アタシ 鬼。

アタシ 鬼でどこにおんの。

作家 どつかに隠れてるんや。探しだすねん。

アタシ 隠れてるんやったらほっとときいさ。

作家 ほっとかれへん。ほっとかれへんねん。

アタシ なあ、服きたら。

作家 神さんは服なんか着るか。

アタシ おとん、神さまちやうやか。

作家 なるねん。今から、鬼の裁判が終わって、俺を取り戻したら、神さんに、なるんや。

列をなしていた家族たちはそわそわと動き出す。

お兄ちゃん おかん、何してるねん。

お母さん あんたら家中の刃物全部集め。

お姉ちゃん なんで。

お母さん ええからはよお。

作家 何してるねん。さっさと座れ。

びくりと身体を強張らせて、

アタシの家族たちは作家に言われたとおりに、作家のそばに正座する。

作家 裁判が終わるまで誰もどこにも行ったらあかんあかんあかんあかん、お前とお前はあかん。

作家がアタシとお兄ちゃんを指さして怒鳴る。

作家 お前らは俺の子ちやうからあかん。こいつ、

今度はお姉ちゃんの腕を掴んで怒鳴る。

作家 こいつだけが俺の子やから。

お兄ちゃん んなわけないやろ。
作家 そうやそうやそうなんや。
お兄ちゃん おかん。

お兄ちゃんは思わずお母さんを見たが、
お母さんはもう疲れ切って何も言葉が出ない。
作家はとてつもない力でお姉ちゃんの腕を引っ張る。

作家 この罪の子と一緒に飛び降りたる。
お姉ちゃん ……いやや。

逃げようとするお姉ちゃんを、作家は離さない。

作家 飛び降りて死ぬ、死ぬ、死ぬ。
お姉ちゃん 嫌や、あたし死にたくない。
作家 飛び降りて死んだら、そしたら神になれるんや。

お姉ちゃんは泣きながら逃げる。
それを引っ張る。
お母さんとお兄ちゃんがどうにかして作家からお姉ちゃんを引き離す。
お姉ちゃんは泣いている。
お母さんとお兄ちゃんも何かを言っているけれど、
言葉にならない。

作家 その前に鬼見つけて裁判や。

という、
いつかの日のことを、
あたしはじっと見ている。

あたし その時、分かったことがあるんや。大人ちゆうもんは、みんながみんな、あほやいうことを、なんか分かってしまった。死ぬてなんやろか。簡単に死ぬるんやろか。一緒に死ぬるてあるんやろか。そもそも死んだら神さまになれるんやろか。あたしはまた、

小学校3年生のアタシはまた神棚を見上げた。

あたし やっぱり神さまは見えへんかった。学校は休んだ。季節がいつやったかは覚えてない。叫び声だけが聞こえてた。叫びながら、また、ニンジン进行を削り始める。ニンジンジュースが大量に作れそうやで。和室の角にかたまったアタシらは、それを見てる。お姉ちゃんは泣いている。泣いてもしゃあないで。今日もまた、学校を休んだ。誰も家から出られへん。今日もまた、叫ん

でニンジン削ってる。まっばで。神さまになるための修行みたいに。まっばで。神棚はびかぴかに磨かれてる。誰も何にも喋られへん。ニンジンは何本も何本も砕けていく。それを見ているのは、もう飽きてきた。

お兄ちゃん おとんが寝たら、あの神棚壊してしまおう。

アタシ 神さん、壊してしてもええの。

お兄ちゃん あれは神さんちゃう。

アタシ ほな、ナンや。

お兄ちゃん だってあれが飾られてからおとんおかしいやろ。

アタシ ほな、おかしなっただんは神さんのせいってことか。

お兄ちゃん 見張つとこう。おかんはもう疲れて寝てる。

アタシ お姉ちゃんは、

お兄ちゃん 泣いてる。

アタシ なあ。そしたらあたしがおとん、寝かしつけてきたるか。

お兄ちゃん 何言うてるねん、近寄つたらあかん。

アタシ 大丈夫や。別に怖わあらへん。

お兄ちゃん あんな、あれはもうおとんとちがうんやで。

アタシ ほな、ナンや。見えてるのはおとんやで。中身は違うんか。中身だけ変わることであるんか。ほな今までのおとんはどこ行ったん。中身だけどつか歩いて行くことってあるん。ほしたらなんで帰ってけえへんの。家どこ分からんようになってるんか。迷子か。でも見えてるのはおとんや。

お兄ちゃん やめろや、そんな俺に聞かれても、俺も、どうしたらええか、なんか、もう、

アタシ 分からんか。そうやんな。お兄ちゃんは、おとんとちゃうから、分からんよな。あたしも分からんもん。でも、なあ、おとんの中身がどっか行ったんやったら、今は何が入ってるんや。

神棚の神さん、見えへんけど、神さん入ってるんか。

お兄ちゃん 神さんはもつとええもんやろ。

アタシ なんて。会ったことないのに。なんで分かるん。神さんって、ええもんで誰が決めたん。

見た人おらんやろ。そしたら、あんなもんかもしれへんで。ああやって何もせんとまっばで叫んでるだけかもしれへん。

お兄ちゃん おい、あかんて。

止めるお兄ちゃんを無視して、

アタシ なあ。

作家 なんや。

アタシ いつ終わるん。鬼の裁判、鬼見つけられたんか。

作家 おらん。うまいこと隠れてる。

アタシ ニンジンの中におるんか。

作家 これはニンゲンや。

アタシ ニンジンに見えるけど。

作家 よう見てみ。見えるか、お前には見えるやろう。

アタシ ニンジン。

作家 よう見とってみ。ニンゲンの形に見えてくるやろう。

アタシ なんで削ってんの。

作家 これは俺や。

アタシ ニンゲンなん。おとん神ちやうの。

作家 まだや。まだなられへん。

アタシ 砕けてるやん。

作家 砕けてる砕けてるねん。

アタシ ニンジン、ぼろぼろや。

作家 俺や。これは俺や。

アタシ 昨日も今日も、寝てへんやろ。

作家 寝てるスキに鬼が逃げたらどうするねん。

アタシ 寝られへんのか。

作家 寝てられへんだけや。

アタシ お話でもしたるか。

作家 いらん。

アタシ トランクの話やで。

作家 いらん。

アタシ おとんが話してたトランクの話やで。

作家 そんなん知らん。

アタシ 憶えてないんか。

作家 知らん。

アタシ 筏に黒い棺桶乗つけて水平線のむこおおおおからやってくるねん。

作家 知らん。

アタシ はたはた白い旗が揺れてるねん。

作家 知らん。

アタシ 僕がニンゲンのヒミツを知る話やねん。

作家 知らん。

アタシ 僕のもとに筏がするするやってきて、

作家 知らん。

アタシ 重たい棺桶開ける。

作家 知らん。

アタシ 棺桶の中には108種類の免許を持った年老いた僕が眠ってる。

作家 知らん。

アタシ 僕は覗き込む。

アタシ 僕を覗き込む。

アタシ 108種類の資格証明書を一枚ずつ読み上げる。

アタシ 普通自動車運転免許。英検3級。簿記2級。調理師免許。小型船舶操縦免許。ホームヘルパー3級。司法書士。中学校教諭免許。図書館司書。宅地建物取引主任者。これらは僕を何も表していない。僕のイレモノだけがある。右腕を持ち上げて横腹を覗き込む。ここにはない。左太ももを少し開いて内太ももを覗き込む。ここにもない。死後硬直で固まった唇をこじ開けて覗き込む。ここにもない。

パツパツパー

車のクラクションで振り返る。

家でも病室でもどこでもない。
町。

空に突き刺さるビルが見える。

横断歩道を歩く足音が聞こえる。

宣伝カーが通り過ぎる。

笑い声が子守唄。

町はなにも眠ってなどいない。

その町を見つめている「僕」の後ろ姿。

しばらく街を見つめていた「僕」歩き出す。

と、そこに。

寝転がっているニコがいる。

ニコ ああああ危ないがなににいちやん。し、下見て歩かな。

僕 下を向いて歩こうなんて歌は流行りませんよ。

ニコ そそ、そのうち流行る。この町さ3歩あ、あ、歩けば人間にひつつまずく。かんかんかん棺桶引きずってどこ行くの。

僕 僕はどうやら死んでしまったみたいなんです。

ニコ ああ当たり前や。こ、こは死人しかおらんで。

僕 そうなんですか。

ニコ そ、そその棺桶、い筏に乗ってやってきたんか。

僕 はい。

ニコ ににににいちやん、い、いい筏から棺桶降ろしてもたんか。

僕 はい。

ニコ ああああかんで、それあかんわ。

僕 なぜ。

ニコ か、か棺桶もろとも筏が沈むのを見届けるのが通常や。にににいちやん、これ常識やで。

僕 そんな常識知りません。

ニコ 知らんからにいちやん非常識なんや。

僕 ではあなたも筏に乗った棺桶、年老いた自分がいっぱい棺桶を見たのですか。

ニコ そ、そそうや。し、し沈むのをじーっと見てたわ。

僕 つまり僕は死んでしまった。ということとはここは天国。

ニコ ぢぢぢぢ地獄でもかまへん。

僕 まったく天国臭くないんですが。だってAKBが歌ってますよ。

ニコ あああああれはCGSや。

僕 シゴノセカイの略ですね。

ニコ 平均年齢は75才や。

僕 寒気がします。

ニコ い、いいいつまでも生身を引きずってたらいかんでにいちやん。なんで棺桶降ろしてもた

んや。

僕 棺桶の中の年老いた僕は、困ったことに何もしゃべりません。

ニコ そそそらそうやろう。これはホトケさんや。

僕 まるでただのモノのようです。

ニコ それがなななんんで困るんや。

僕 だから、棺桶の中の年老いた自分が、本当に僕なのか、どうやって証明すべきかと思案したんです。

ニコ しよしよしよしよーめい。

僕 はい。

ニコ なななんんでそんなことせなあかんの。

僕 僕は、

僕は棺桶を開けて、年老いた僕を見た。

108種類の資格証明書にある僕の写真を見た。

僕 こんなに生きた実感がありません。

ニコ ご、ご愁傷さまやなあ。

僕 はい。

ニコ な、ななん、な、なんやイロイロ押し殺して生きてたんちゃうか。

僕 さあどうでしょうか。

ニコ ちんこ。

僕 は。

ニコ ち、ちんこ船長のところ行ってみたらどうや。ニコからの紹介やて言うたら話早いわ。

僕 ちんこ、船長。

ニコ いい、い、生きてる間のコトを押し込めたコンクリの船の船長や。

僕 はあ。

ニコ jijji、じ、自分が、どどどんなふうに、生きてたか、ふりふりふりかえることが出来る船や。

僕 そこに行けば、これは僕そのものだど証明できるでしょうか。

ニコ し、し知らんけど。行ってみると分からんな。はい。

僕 何ですか。

ニコ 銭に決まってるやろう。

僕 僕はあなたから何か買いましたか。

ニコ ジョジョジョジョーホーや。

僕 それだけで。

ニコ ち、地獄の沙汰も金次第で言うの、知らん。

僕 やっぱり地獄だったか。

物語2 僕とちんこ船長

ポオオオオオオオオオ

汽笛が鳴る。

しかしそこは大海原ではない。

ゴ
ゴ
ゴ

ちんこ船長のイビキが聞こえる。

草原のど真ん中。

どこまでもどこまでも緑一面。

空の青と、地上の緑がどこまでも続くだけの場所。

ドカンと一隻の船。

灰色したコンクリの舟。

普通の船の上から生コンを垂らして固めたような、
コンクリの舟。

ちんこ船長はコンクリの船の横に、
草原の上に小さな木の椅子を置いてそこでイビキをかいている。

僕 あもう。

ちんこ ゴ。

僕 あもう。

ちんこ ゴ。

僕 ちんこ船長。

ちんこ ゴ。

自分のイビキで目が覚める。

ちんこ ふせじなしでよばれたのはひさびさやなあ。

僕 言い淀んですみません。

ちんこ ええでえ。

僕 ニコという浮浪者にここに来ればいと教えられたのですが。

ちんこ へえ。

僕 少し安心しました。

ちんこ 何が。

僕 名前が名前だけに、ナニのカタチをした船だったらどうしようかと思っていましたので。

ちんこ なまえなんかおでもええ。かたちなんかもおでもええ。だってにいさんかたちもな
いなづけられへんもんをここにさがしにきたんやろう。

僕は。

ちんこ どうせにいさんうみのむこうでは、だれそれなにがしてよばれてたんやろ。

僕は。ここに資格証明書が、

ちんこ それはぶるいしてるだけや。

僕は。

ちんこ にいさんのうちっかわは、ぶるいできるんか。

僕 あのう、僕が、こうやって、ここまで年老いて生きてきた僕のことを、振り返ってみたいのですが。

ちんこ あれえかんおけひきずってしもてえ。

僕は。

ちんこ こうかいのおおいにんげんはようここにくるわなあ。

僕 僕は、後悔している、ということでしょうか。何に。生きてきたことに。死んでしまったことに。何に。生き方に。死に方に。いや、もしかしたら生まれ方に。

ちんこ しかくしょうめいしよからわりだして、せいぞんばしよは、

ちんこ 船長は黒いチョークでコンクリの船に線をひき始める。

ちんこ 10進法、緯度34.686297 経度135.519661 60進法 北緯34度41, 11“ 東径135度31, 11”つまりおおさかにほん。

そしてあるひとつの点を割り出した。

ちんこ ころらへんかなあ。にいちゃん。ききみみたてや。

ちんこ 船長は僕に聴診器を手渡す。

僕 これで、

ちんこ しー。きいてみ。

ちんこ 船長がシルシをつけた、
ある点に聴診器をあててみる。

ちんこ しー。

僕は。

ちんこ しーずかにしてたら。

僕 聞こえてきますか。

uuuuuuuu

僕 あ。

u u u u u u u

ちんこ 聞こえるか。

u u u u u u u

僕 はい。

u u u u u u u

ちんこ 何が聞こえる。

僕 僕の、苦悩が聞こえます。

u

u u

u u u

u u u u

過去の過去 未来に作家になる僕とアタシ（母親）

僕 ぼくの、くのう。

僕 くのう。

僕 くのう。

僕 くのう。って、どういう意味。

アタシ 悩むってこと。

僕 なやむって、どういう意味。

アタシ 苦しむってこと。

僕 くのう。

アタシ 心配せんでええよ。悩んで苦しむのは他の人ばかり。あんたは悩むことなんもあらへんから。

僕 ないのん。

アタシ ないよ。あるか、今、悩んでることあるんか。

僕 わからん。

アタシ これからもないわ。あつたとしても、

僕 しても。

アタシ お母さんが全部引き受けたる。

僕 ぼくの、くのうを。

アタシ 全部お母さんがもろたるわ。

僕 そんなこと、できんの。

アタシ できるでできる。

僕 でも、ぼくのは、ぼくが持つんちゃうの。

アタシ しんどいもんは持たんでええよ。あんたは楽しいことばかり持ったいたらいい。

僕 うん。

僕 そうする。

僕 でもな。

僕 そしたらな。

僕 おかんおらんようになったら、ぼくのくのう、誰が持つのん。

アタシ そうやなあ。

アタシ それはな。

アタシ 神さんが持ってくれるんよ。

僕 かみさん。

僕 神さん。

僕 神、さん。

過去の現実2

作家 ……かみ、さん……

作家はその言葉を言い終わらないうちに、
うとうと、

と、瞼を閉じはじめた。

アタシはごろんと寝入った作家を見た。

アタシ お兄ちゃん。おとん、寝たよ。

サイレンが鳴る。

電話のコール。

「はいこちら110」

電話の向こうから事務的な声。

「助けてください助けてください」

悲痛なお母さんの声。

「落ち着いてください」

「殺される」

「住所をお願いします」

ピーポーピーポー。

救急車の音はいがいと間抜けに聞こえる。

長靴を履いた救急隊員が乗り込んで、

まっぴのキチガイはキチガイらしくものすごい力で抵抗して、

雄たけび上げながらピーポーピーポーに乗せられた。

アタシはそれを見ている。

救急車の音が遠く遠くに離れていく。

アタシが振り向いた。

アタシ お母さん。救急車の人らって、靴も脱がへんのやな。畳……足あといっぱいや。

あたしは、アタシを見つめた。

看護師の声が聞こえて、あたしは我にかえる。

「ベッドの、ベッドの下、ベッド、あの、あのお、あのお」

あたし 何ですか。

「ベッドの下に、」

「お父さん、ベッドの下にはいますよ」

「ベッドから落ちはったみたいで」

「先生、呼んできますね」

見る。

冷たい床。

ニンジンを削っていた時と同じように、作家がうつぶせに倒れている。

あたしは、あの頃と同じように見下ろす。

あたし ハッ。あんた。肝臓でもなくて、交通事故でもなくて、ベッドから転がり落ちたのが死因になるんか。

作家 段差は命取りやなあ。

あたし まだ生きてるんか。

瞼が痙攣してる。

作家 ハッ。まだ、な。いがいにしぶといわ。

病院の床は冷たい。

でもあたしは手を差し出さない。

あたし 最後まで思い出したで。

作家 そうか。

あたし 「僕」は苦悩の人生を思い出すねん。

作家 そうか。

あたし 何やってもうまくいかなかったことを思い出してまた苦しむねん。それで不思議や思う。

楽しいことはおぼろげにしか思い出されへん。苦しいことと悔しいことばつかりを鮮明に思い出す。でもそのほうが実感できるねん。人間は妙や。

作家 喜びは一瞬、苦悩は一生やからな。

あたし もうこれ以上苦しみを思い出したいくないわと思って、「僕」は棺桶を大海原に沈めようと港にやってくるねん。

作家 そうやったかな。

あたし 棺桶ゆつくり海に沈めたら、今度は溜息船長が現れる。

作家 溜息ばつかりつくあいつか。

あたし はあああああ、言うて。

病室のカーテンの向こうから、ため息が聞こえたような気がする。

溜息 「はあああああああああ……」

どうやらそれは空耳ではなさそうだ。

のっぺりとした白い顔たちが、

カーテンの隙間からあたしを見ている。

溜息 君もとうとう以前の自分と決別できたんですねつまり次の自分になる準備が整ったということですねしかしはあああどうせつらいことしかありませんよこの紙の船が行き着く先は、

作家 それで。

あたし 溜息船長の溜息で吹き飛ばされるような、紙の船を用意してくれるねん。

作家 ああ、やっぱり紙の船は最後か。

あたし そやで。

作家 なんでそいつ溜息ばつかりついてるんやっただけ。

あたし またひとり出航させなあかんことに溜息ついてるねん。

溜息 しかし……

作家 「しかし」

溜息 しかし苦悩を実感した君だから、

作家 「しかし苦悩を実感した君だから」

溜息 次の苦悩の大海原にも耐えられるということになります。

作家 「次の苦悩の大海原にも耐えられるということになります」

溜息 結局は、

作家 「結局は苦悩に耐えられるものでないと、この危うい紙の船に乗ることが出来ません、つまり、」

溜息 生きづらいですが生きねばなりません。

病室のカーテンが揺れた。

もうすき間からは誰も覗いてはいない。

作家 ……そう言うんやったな。

あたし そやで。

作家 ほんで、紙の船は濡れながら海を往くんや。

あたし そや。

あたし この話が、なんで遺言なん。

作家 お前の鬼は、俺やろ。

あたし おに。

作家 俺の鬼はなあ、

あたし おばあちゃんやったんやろ。

作家 知ってたんか。

あたし よお考えたら分かる。神棚が飾られたんは、おばあちゃんの49日が終わったあとやっ
た。おばあちゃんのかわりに背負ってくれる都合いい神さん祭り上げたんやろ。

作家 当たり散らせるもんはな、生身のほうがええで。

あたし おばあちゃんによう当たってたもんな、あんた。おばあちゃんが死ぬ直前まで。

作家 そうしてええ、言うたんや。

あたし 真に受けて最悪やな。

作家 神さんはあかん。当たっても当たっても、暖簾に腕押しや。

あたし 見えへんからな。

作家 当たって当たって、当たりがないからな、自分に返ってくる。

あたし それでキチガイの出来上がりか。

作家 なあなんで結婚せえへんのや。

作家 俺のせいか。

作家 お前、たまに男に生まれたほうが良かった思てるやろ。

あたし 関係ないわ。名前も形も体も。それでもあたしはあたしや。それがニンゲンのヒミツやろ。

作家 神と鬼は似たようなもんでな、鬼に、追い詰められたのに、鬼からもらった物語で救われるんや。あんな。だからな。

あたし 何や。

作家 お前に物語をやるわ。

あたし よけいなお世話やで。

作家 親いうんはそういうもんやでな。

あたし それでもあたしは、あんたとちやうねん。

作家 最後まで可愛げないのお。

息も温度も風もなにもかも、

全てが止まった。

ような気がした。

あたし 暖簾に腕押しでも、あたしは神さんに当たるわ。何の因果であんたんとこに生まれたんか、神さん呪うわ。絶対に生身の誰かになんて当たらへん。だからな、

あたし あんたのこと許す。

心電図はまっすぐ一本の道を示す。
無機質な機械音P Iとともに。

風が吹いた。

海の上で生まれた風は、

長い旅をしてここまでやってきた。

作家の言葉を書き連ねていたA 4用紙を海の風が巻き上げていく。

バタバタと、

カーテンが風に揺れた。

危うい紙の船たちが、

きつとあたしの涙を覆い隠してくれるだろう。

おしまい